

2017 年度事業計画	2017 年度事業報告
<p>1. 基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創立者砂本貞吉牧師と N.B.ゲーンズ女史が建学の精神の土台とした、聖書に基づくキリスト教精神に立って、生徒の人格的成長をめざし、将来、国や国際社会、地域、家庭において、使命感と奉仕的精神をもって活躍することのできる、リーダーシップ・シティズンシップをもった女性を育てることを目指す。 ・変化の大きいこれからの社会を生きていくために必要とされる、精神的自立と幅広い知識や技能を身に付け、これらを応用し活用するための能力と柔軟で豊かな感性を育てる。また他者と協働しつつ問題解決を図ろうとする人間性・社会性・協調性を養う教育を行うことにより、地域における女子中高教育機関としての存在感を確立する。 <p>2. 具体的アクション計画</p> <p>○SGH 教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SGH 認定4年目の取り組み。 <ul style="list-style-type: none"> 4年目となる今年度は、PS(ピーススタディーズ=SGH 推進のための6学年カリキュラム)の充実を図るとともに、中高6か年に渡るこのカリキュラムを3年間進めてきた中で分かかってきた問題点を明らかにして、改善を進める。また、SGH プログラムの残り2年終了後を睨んで、本校が今後長期的に取り組むべきPSのあり方を検討する。 生徒らの学びにおいて、基礎的な知識・技能の習得を高めると共に、問題解決能力の育成を目指し、それらを主体的・協働的に進めていくことが出来るようになることを目標として、AL(アクティブラーニング)を更に進め、教科教育やHRを始めとした特別活動を進める。また、ALを取り入れることで、学びが表面的なもので終わることが無いよう、学びを深めていくALを目指す。 ・海外研修 <ul style="list-style-type: none"> オーストラリア・キルヴィントンスクール海外生活体験学習、アメリカ・マウントユニオン大学短期研修・モントレー大学院 CIF、カンボジア研修、韓国研修、ミャンマー研修、ハワイ研修を継続しつつ充実を図る。また同時に、現在、これらの対象者が一部を除いて高校生中心となっているため、これを中学生にも幅を広げ、早期に海外研修を行うことにより、体験を通してグローバルな意識に目覚めさせ、その後の発展をより充実させられるよう検討する。 ・碑めぐり等 <ul style="list-style-type: none"> 碑めぐり、核兵器廃絶署名活動については、これまで係の教員による引率としていたが、今年度より引率者を全教員が担当し、生徒・教員が共々に実際に体を使っ 	<p>1. キリスト教精神に基く教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中高におけるキリスト教教育は日々欠かすことなく行われる始業時の礼拝が基本となっている。日常の学校生活を始めるに当たって、教員生徒が共に神の前に出て静まる時を、中高其々が全校で集まるホール礼拝、教室で行う放送礼拝、学年毎に集まる学年礼拝、の形で守っている。礼拝の感話はクリスチャンのみならず全教師の協力も得て行っているが、全員が礼拝の持つ意義を大切にしてお話を聞いてくれた。「イースター」「平和を祈る週」「創立記念礼拝」「卒業記念礼拝」等の年数回の特別礼拝では、院長先生・牧師先生等のお話を頂いて意義深い時を持つことが出来た。また、中高それぞれに行なわれる生徒礼拝では、生徒自身の口を通して語られる同年代の仲間の経験や、それを通して考えた様々な心の内面の動きを共有することで、大きな共感や学びを与えられた。しかし、こうした生徒の指導は教師が生徒と共にその心を開きつつ行うことにより豊かな成果を得られるものであり、労の多い作業である。また必ずしも思った方向に進まない場合もあるが、感話を共有する他の生徒達の豊かな内面的経験とするべく、担任と学年会の教員達が協力しあって進めていくことができた。 また、秋のキリスト教強調週間には安積力也先生を講師に迎えて、若い時に自己の内面と真剣に向き合い、本当の自己の姿と対峙しながら、神から与えられた人生を豊かに生きることについて講演を頂き、中高生それぞれに、例年以上に深い学びを頂くことが出来た。今回は夏休みの教師研究会でも同じ講師に来て頂いてお話を聞き、キリスト教学校に働く者としての教師の歩みについて考える時をもったことは、意義深かった。 年間を通して様々な行事が行われているが、キリスト教に関わるこれらの行事は最も生徒達が精神的に深められ、成長するための力を与えられる機会となった。 本校の教育活動は、常にこのキリスト教主義教育の土台に立って進められることを確認し続けていかなければならない。 <p>SGH に関するグローバル教育総括は、文科省提出書類に依るが、3月末を作成期限としているため、後程の報告となる。</p> <p>(1) Peace Studies</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学年とも前年度をまるごと踏襲するのではなく、学年の実情に応じ、なんらかの工夫をしながら実施した。 ・高校の課外活動(碑めぐり、アーカイブ等)を中学生にもなじみのあるものにするため、中1生対象に高校生27人がクラスごとにプレゼンテーションとデモンストレーションと行なった。意義は大きい。 ・SGH指定初年度よりPSの二つの領域のつながりや、学年間のつながりを再点検し、再構築することを目標に掲げているが、2019年度に課題研究を開始予定でもあり、過渡期にある中での再構築には少し時間を要する。 <p>(2) 国内・海外研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外研修については、帰国翌日を休日とし、感染症の有無確認はもちろんのこと、きちんと疲れをとって、通常の学校生活に戻ることを目標とした。事前・事後学習のあり方は海外研修を充実させるには重要な部分であるが、どの部分をどの程度減らし、どこを増やすのか、など体系的な見直しをして考える必要がある。 <p>(3) 課外活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Peace Forumについては、国内からの参加が更に増え、全参加生徒は130名を超えた。ただ海外からはプナハウスクール(ハワイ)の3名のみであった。しかし、内容としては、核軍縮に関わるNGOについてのリサーチをポスターセッションとして発

た活動として取り組み、充実させていきたい。ピースフォーラム等、平和教育活動についてはこれまでの活動を継続し、充実を図る。

・GI (グローバルイシュー) クラス…3 年目となり、高 1 から高 3 まで 3 学年のクラスが揃うことになる。GI は授業単位に組み込まれると同時に、放課後の活動(クリティカルシンキング・ディベート等のクラス学習、TOEFL 学習) も行うが、高 3GI においては、大学受験を控える学年となるので、授業時のみの活動とする。

・HR 環境の整備

生徒の各 HR における受容度や安心度をアンケートに基づき数値化・視覚化する QU(=questionnaire utilities)については、HR 環境を良好にして、生徒の自主的学習環境を整えていくための有効な方法と考えているが、学年における共有、理解、活用が課題となるので、学年会での取組を充実させる。

・英語特設クラス

英語特設クラス…3 年目となるので、中学における特設クラスは 3 学年が揃うことになる。英語科を中心に、この 3 か年カリキュラムを整備し、次年度の高校における英語特設クラス開設について検討する。また、このクラスの今後の継続性、特設クラスへの一般クラスからの編入、またその逆の対応について検討する。

・修学旅行等

高 2 沖縄修学旅行、中 3 長崎研修旅行は PS カリキュラムの平和学習として重要な位置にある。ここにグループによる生徒の自主的活動をより多く取り入れ、現地にお

表するものであり、最後には投票をした。台風の影響で日程を縮小して実施したが、当初の予定を概ね達成できた。

・顧問が2016年度の2人体制から今年度は4人体制になり、年度前半うまく利用できなかったが、後半からは分担しながら動くことができた。ITに強い教員がいたことも非常にありがたかった。

・今年度、交流会を中3 (一部中2) にオープンにすることで、少し拡大させた。また、中3の次年度GI生には既に模擬国連の初歩を学ばせる機会を提供した。中3では、他県の平和教育事業に協力する形で、機会を提供した。中1にはPS高2生が碑めぐり・アーカイブデモ・プレゼンを実施。

(4) GIクラス=Global Issues

・ようやく軌道に乗ってきた感があり、特に高1は当初目指したような、生徒自身からの提案や奉仕精神をもった雰囲気になりつつある。また高3はGlobal Issues一期生である。29名でスタートしたが、高3では大学入試の関係で17名が選択をした。国内外の諸問題、特に生徒にも関わるような問題を取り上げ、生徒たちは意欲的に学んだ。最後まで残った生徒たちは、GIでの活動を通じて培った力を活かし、それぞれの進路を切り開き、難関大学合格を果たした生徒もいた。

・生徒の成果の蓄積についてポートフォリオを検討したが、実施には至らなかった。今後教育構想委員会で検討してもらうことになっている。必要があれば本部会としても協力をしたい。

(5) 課外活動と中学生 :

・すそ野が広がりつつあるが、授業の終了時間のずれ、部活動や下校時刻などの諸問題は依然として存在しており、リーダー育成という観点から柔軟に対応する必要がある。

(6) その他

・アーカイブ収録に付随して、ワークブックの制作、モノクロ写真のカラー化、視覚障害者用のアーカイブ3Dマップなどのプロジェクトが始まった。これによって、被爆当時のみならずそれ以前の風景が現実に近く再現され、被爆者の方たちの過去の記憶の再現がより豊かなものとなってきた。

・海外の大学に進学する生徒数は増えていない。これは安全性や経済的なことなどが大きいと思われる。今後も急激に増えることは考えにくいだが、希望が出たときの指導を考えておかななくてはならない。

・海外からの短期留学生やゲスト来校にともない、ホストファミリーを確保する必要があるが、幸いなことに、希望が多く出るケースが多い。リストを作るなどしてより多くの家庭に機会を確保したい。

○SGH 後の対応

・2018 年度をもって SGH 指定が終了する。終了後も存続するものとそうでないもの、存続するが形が変わるものや経費がかかるものなど、懸案事項が山積している。学校の方針を 1 学期末までに立て、夏休みから 2 学期にかけて、新年度の変革に備えたい。

・HR 環境の安定は学校生活の基本であり、生徒のクラスにおける生徒の受容度の変動を知る上で活用された学年もある。一方、データが十分活用されていない面も見受けられる。しかし、データの分析が目的ではなく、担任が自身の目で生徒の状況をしっかり観察し、どのように適切な働きかけをするかが重要である。

・英語特別クラス 特設クラス中 1…9 名 中 2…6 名 中 3…11 名

英語特別クラスは中学校 3 学年が揃った。中学入試時に英検 2 級・準 2 級該当者には優遇措置を行う。また、合格後、特別クラス希望者には適性を判断する機会をもってメンバーを決定している。教材や進め方は構成生徒に合わせて行う。秋には私立学校特別研修会の英語部会が開かれ、研究授業を行った。中 3 特別クラスの授業も公開されたが、参加者から生徒のモチベーションや内容について高い評価が寄せられた。また、高校 1 年段階においてもこのクラスを継続することを決定した。

・沖縄修学旅行 : 2 学期の沖縄修学旅行では今年から 2 日目の平和学習をクラス単位ではなく、6 つのコースに別れて行うものへ変更した。それに伴い 6 つのコースのリーダーを募集し、修学旅行の事前研修を夏休みに行った。生徒が主体的に平和学習に取り組むためであり、9 月にはリーダーを中心に事前学習をコース別に行い、現地での学習を迎えた。修学旅行後にはコー

2017 年度事業報告(中高)

ける研修を深めることが出来るようにする。長崎研修においては昨年度より実行しているが、沖縄修学旅行においても、研修目的に応じたグループ活動を十分に取り入れ、より自主的で内容の充実したものとする。

・高大連携

広島女学院大学、広島市立大学、広島大学、一橋大学をはじめとする大学の教員との連携の中で、出張授業やクリティカルシンキング授業、アーカイブ作成指導・活動指導等の活動を実施する。またそれらの手法を中高の教育活動に取り入れていく工夫をする。

○生徒の自主性を育てる活動

・チャレンジキャンプ

中 2 生徒対象。リーダーは高 1, 2 年生志願者約 50 名が担当。2 泊 3 日の小グループによるテント生活、登山活動を通して、自然の中での生活や登山などへのチャレンジ精神を養うと共に、リーダーとなる高校生の姿を間近に接することで、リーダー像を確立する。また、高校生には、事前学習・プレキャンプ・中 2 の指導を通して、リーダーシップの育成を目指す。

・生徒会活動等

生徒会活動等における、自治活動の充実。部活動、文化祭、生徒会活動等において、顧問との良好な関係の中で生徒が意欲的、自主的な活動を進め、広島女学院中高にふさわしい部活動を展開するようにする。

・碑めぐり活動、核兵器廃絶署名活動

これまで他県からの高校生、各種の海外ゲスト等外部の人々を対象に行ってきたが、これを本校の高校生から中学生に対して行うことにより、平和創成への活動や意識の継承、またリーダーシップを学ぶ機会とし、中学生による自主活動の活発化を図る。

・おさんぽリーダー・じょがく in Love リーダー

7 月と 2 月に開催される小学生の為の学校紹介行事において、学校案内・学習指導・クラブ紹介等を中高生自身の手で行い、小学生に学校を紹介する活動を通して女学院生としてのリーダーシップを育てる。

・OL (オリエンテーションリーダー)

中 1 新入生の女学院生活開始にあたって、学校生活・授業・部活動・学外生活についてのオリエンテーションを中学の上級生が行い、新入生に女学院生としての自覚を持たせ、中学校生活がスムーズに開始できるようにする活動。リーダーは中 3 生徒志願者約 40 名。中 1 生徒への指導を通し、新入生が学校生活への安心感と親しみを持つと同時に、更に上級生の活動する姿を通してリーダー像を学ぶ。また、活動を通して中学 3 年生のリーダーシップを育てる。

・各学年遠足

行先や目的等、各 HR において生徒が企画立案を行う。

ス別に発表を行い、全体で共有をした。生徒たちの反応はとても良かった。また、何よりも 216 名の生徒全員が欠席せずに修学旅行に参加できたことがこの修学旅行の成果である。

・高大連携

広島女学院大学、広島市立大学、広島大学、大阪大学、首都東京大学、山梨学園大学、マウントユニオン大学等の大学と連携して、講演、出張講義、アーカイブ作成作業、大学研修等を行った。

・チャレンジキャンプ

全体の行事は大きな問題もなく終わることが出来、最初はあまり行きたくないといった中 2 の生徒もいたが、感想を読む限り、ほとんどの生徒が満足感を得ることができ充実したものとなった。いつもの整えられた日常を離れて自然の中で、高校生リーダーのもと様々なチャレンジを経験できた。ただ、この行事に欠かせない高 1・2 年生のリーダーボランティア志願者が、夏休みの多忙さの中で、減少していることが懸念される。

・生徒会活動

あしなが募金該当募金活動並びに、文化祭模擬店の売り上げをあしなが基金へ寄付。体育大会の応援団が円滑に進むように準備等を行った。
文化祭：HR 発表…文化祭実行委員会が設置されたことで、4 月から HR 発表の内容を考え始めることができた。2 学期から動き始めていた昨年までと比較すると、随分内容を深めることができた。また、中学生の参加場面を増やす意味でペットボトルキャップアートを高校生徒会で企画・運営し、中学生全クラスに呼び掛けた。
PTA との連携…お父さんの会のパトロールを防犯の為増やしてもらい、PTA 売店の中学生手伝いを配置した。

・碑巡り活動

全教員、碑めぐりと署名活動の引率を 1 回以上必ずすることの校長方針により、数名を除き達成でき、教員間での共有感は進んだ。また碑めぐりについては、上級生が下級生を指導する仕組みを構築したいと考えている。高校の課外活動(碑めぐり、アーカイブ等)を中学生にもなじみのあるものにするため、中 1 生対象に高校生 27 人がクラスごとにプレゼンテーションとデモンストレーションと行なった。中学生への動機づけの意味は大きく、彼らはその意識を基に自主的に考え行動できるようになることを期待している。

・おさんぽリーダー、じょがく in Love リーダー

小学生が直接学校の生活を体験し、中高生と触れ合うことが出来る機会は、学校を知るうえで貴重な体験であるが、中高生は大変積極的にまた、優しさをもって接し、好感を与えることが出来た。

・OL：生徒のリーダー選出に関していかに質を保ちつつ、生徒の挑戦への志を尊重するのかのバランスが求められている。今年度の募集でも役割分担で生徒同士の行き違いがあった。「中 1 生徒のため」という新中 3 の思いを保ちつつ、うまく運営する必要がある。また 2016 年度より学校説明会においても活躍しており、活動の幅は広がりつつある。生徒のモチベーションは総じて高い。

・各学年遠足

2 学期のクラス別の遠足は、行き帰りの時間設定の中で、行きたい場所の選定など、HR 委員を中心に計画を立て、各クラス楽しい遠足となった。

○広報・入試対策

社会的経済状況の見通し、日本の将来像が見えにくく、子供人口も減少する中で、公立学校の中高 6 年教育推進などの改革の影響により、広島県の私学への進学者数は減少している。本学を始めとする私学に学ぶことのメリットや意味をより明確に打ち出し、入試関連教育機関との情報交換により、常に外部からの新しい情報を取り入れ、受験生や保護者に身近に本校の存在を感じてもらえる広報活動を行う。

今年度は本校保護者・小学生保護者を対象とした一般に開かれた教育講演会を、年間を通して数回行い、外部講演者の視点を通して、広島女学院に学ぶことの意味を伝えられるようにしたい。

web 出願の 2 年目となる。これによる入試事務業務の合理化を図る。

○大学入試

・進路指導を通して、生徒達が自分の将来像を描けるようになるとともに、高い目標に向けて希望とチャレンジ精神をもって臨めるように指導する。大学入試においては高い学力の育成を目指すと共に、生徒達が目指す目標に向かって最後まであきらめることの無い忍耐力を持てるように、学年会を中心とした教員によって生徒をフォローしていく体制を整える。

国公立大学進学者数 90 名を目指す。また、社会におけるリーダーシップを発揮する機会を広げるため、難関国公立大学で高い教育を受けることを希望する意識を育て、それらの受験生に対して必要な支援をし、継続的に進学者が出るようにする。また、生徒の個性・学力に応じた大学選択を通して、生徒達の目指す将来像を実現できるよう支援する。

・大学入試が 2020 年より新テストに移行することに対応するため、2016 年には該当する中 2 の学年と高 1 GI 生に対し、新テスト対応のための論理力評価テスト等を実施したが、これらを継続して新しく求められる能力評価に対応できるようにする。

○教員の教育力の向上

アクティブラーニングを推進し、授業力向上・生徒支援能力の向上を目指す。このために、教員内の授業見学・研究の機会を増やす。

○生徒の基本的な生活習慣・あいさつ習慣・校内廊下の通行マナー・交通安全意識（電車や公道マナー、自転車運転等）の向上。

○読書の推進・中学校 HR 文庫、図書館、高校設置図書を活用。

・広報入試対策

1. 例年通りの様々な行事を粛々とこなした。特におさんぽ女学院の企画では、申し込みフォームの改良もして、多くの来場者で大いに盛り上がった。

2. きめ細かな塾訪問と意見交換の実施を心掛けた。**公立の中高一貫校の攻勢に確実に中学受験を目指す女子児童の減少は進んでいる。本校単独もしくは共同開催で、所謂「塾の教室を借りての学校紹介」と「本校の教室を利用した訪問形式の学校紹介」も考えていく必要がある。**

3. 保護者対象の教育講演会（5 回予定）を行い中学受験生の掘り起こしを狙った。5 回の来校者は延べ 600 名であった。ただし、小学生保護者の参加は平均して 4% であった。しかし、4% の方々が足を運んでくれたことは小学生保護者の掘り起こしに繋がったと評価したい。

4. HP の担当者を中心に、魅力的な HP の作成と中身の充実を図ることを目標にし、広報部の中で、担当者を決めたりしたが、HP にアップする回数は伸びなかった。

・大学入試 2018 年 4 月 24 日現在

国公立の合格者数およびセンター試験(900 点満点)の全国平均(ベネッセより)との差は以下の通りである。

	国公立合格者数			センター全国平均との差	
	計	前期(現+既)	後期	文系	理系
2017 年度高 3	81	66(50+16)	15	+81	+63
2016 年度高 3	76	55(45+10)	21	+94	+44
2015 年度高 3	83	64(48+16)	19	+88	+54
2014 年度高 3	89	57(49+ 8)	32	+94	+60
2013 年度高 3	87	65(47+18)	22	+78	+37

前期に AO・推薦、後期に中期を含む

国公立の合格者数は、81 名(現役 60 既卒 21)となり、目標の 80 名をクリアした。

AO・推薦入試に関しては、国公立は 33 名受験のうち九大 1 名と神戸大 1 名を含む 7 名が合格し(昨年度は 26 名中 5 名、一昨年度は 39 名中 9 名合格)、合格率は前年並みであった。私立大は好調で、慶応大学 3 名、早稲田大学 4 名、上智大学 4 名など、難関大学にも多数合格している。私立大は一般入試の合格者を絞っているため、推薦・AO からの受験を勧めたい。

国立難関大学の合格者数は 17 名(現役 11 既卒 6)で、内訳は京大 3 (現役 2 既卒 1)、阪大 3(現役 1 既卒 2)、九大 4(現役 3 既卒 1)、神戸大 7(現役 5 既卒 2)である(2016 年度 8 名、2015 年度 15 名、2014 年度 14 名)。合格者 17 名中 10 名(現役 5 既卒 5)が理系であり、内訳は京大 3 名(うち現役 2)、阪大 2 名(既卒のみ)、九大 3 名(うち現役 2 名)、神戸大 2 名(うち現役 1 名)であった。現役に関しては、**前期において**、京大は 4 名中 2 名、阪大は 1 名中 1 名、九大は 4 名中 1 名、神戸大 8 名中 3 名が合格するなど、合格率はかなり高かったが、阪大や神戸大を中心に本校の強みである文系の合格者数をもう少し増やしたいところである。東大合格が 3 年連続とならなかったのは残念である。**国公立医歯薬系**の合格は、医 2 名(既卒 2)、歯 1 名(現役 1)、薬 3 名(現役 2 既卒 1)の合計 6 名であった。広島大学の合格者数は 23 名で、内訳は AO2 名(現役 2)・前期 16 名(現役 14 既卒 2)・**後期 5 名(現役 4 既卒 1)**である。現役は前期 29 名受験中 14 名合格だったので、合格率は 48%(昨年度 62%、一昨年度 39%)と健闘した。難関私立大学の合格者数は早慶上理 18 名(前年 27)、MARCH35 名(前年 46)、関関同立 113 名(前年 104)であり、定員超過抑制のため各大学が合格者数を絞っているため関東は厳しかったが、関西では健闘した。

・教員研修

学校視察：各教科の教科力向上、IT 関係施設・端末機使用などの先進校等、また生徒支援の先進校やカウンセリング講座等に教員は積極的に参加し、本校の今後の教育改革に必要な情報を収集し、具体化に向けて各部署で検討を行っている。

・あいさつ習慣については、基本的にできる生徒が多いが、非常に積極的という訳ではない。来客の反応としては、それが自然な雰囲気の中で形式的でないことに好感を持たれることも良くあるが、もう少し積極的であっても良いと感じることもある。移動教室などで時間に余裕がなく廊下を走るケースが見られ、計画的な行動が事故予防にもつながることを伝えてきたが、徹底は

○ICT 環境の整備

- ・電子黒板を中 1 全教室に整備したが、授業における利用度は高く、今年度は中 2・3 全教室に設置することにより、IT 教材の活用による授業等の向上を目指す。
- ・生徒各自が個人端末を持つ環境作りについて、NET 使用上のモラルの整備、施設整備等について検討を進める。

3. 人事構想（基本）

現在の財政状況に鑑みて、専任教職員を原則増員しない。（但し、現在社会 1、理科 1 については、未補充状態が継続中。英語 1・国語 1 は再雇用で補充中。）また、英語のネイティブ教員 1 名については、今後のグローバル・英語教育推進のために必要となるため、ふさわしい人材があった場合は、専任採用をしたい。（現在は臨採）

上記構想にもとづく 2017 年度専任教職員は、次のとおりである。（2017.4 現在予定）

聖書科	2	国語科	7 + 再雇 1 + 常勤講 1
社会・地歴公民科	7	家庭科	2
数学科	10	理科	7 + 育休 1
英語科	10 + 再雇 1 + 任期付 1 + 臨 1 + 育休 1	音楽科	2
美術科	1	体育科	4
養護教諭	1 + 臨採 1	司書教諭	1
計 62 (内 育休 2 時短 1) (非常勤講師数 約 43 未定)			

4. 施設・設備整備・資金計画

- ・2022 年頃を目標とする体育館建て替えに備えての積み立ては、法人の意向により 2016 年度は保留したが、今年度は施設拡充特定資産（2 号基本金）として 5000 万円の積み立て予定。積立額は 2 億予定。
- ・SGH（2014～2018 年）経費の内、管理者負担分経費については、2013 年度・松尾氏からの寄付金 5000 万円分をこれに充てる。

（計画検討中の工事）

- ・校舎の IT 化（LAN 整備。電子黒板整備。）

出来ていない。通学時の自転車事故もおきており、時間的余裕を持って行動することで防げるものもある。

・ICT 環境の整備

中学普通教室 10 部屋及び高校会議室に常設型のプロジェクターと書画カメラ、スクリーン、インターフェイスボックスのセットを設置。使用したいときにすぐ使用できる環境になった。

・プロジェクター類の整備

高校普通教室 16 部屋(106 改装分も含む)に、ポータブル式プロジェクターと書画カメラのセットを設置。企画委員会の提案により高校全普通教室にもプロジェクターを整備することになった。高校普通教室は、黒板が上下移動式のため、中学普通教室と同様の常設型のプロジェクターを設置するためには非常に高額になってしまう。その為ポータブル式のプロジェクターの設置になった。授業で使用する教室に生徒用 LAN を無線化することで、ICT 機器を活用した授業をできるようにした。iPad を使い、問題の配布と提出を行うなどといった授業展開も見られた。また、自習室 2 に AP(アクセスポイント)を設置したことで、教員室前の廊下スペースが無線化されたため、放課後に研修の事前事後活動等で生徒が気軽に同じグループの生徒と話をしながら作業できるようになった。

・2019 年度以降の教育構想に向けた整備

ラーニングコモンズ開設に向け、プロジェクターを購入した。内訳はメインスクリーン用に 3 台、グループ活動用に 8 台である。ラーニングコモンズのフリーレイアウトであるという特性に対応するため機種を選定した。

3. 人事構想（基本）

現在の財政状況に鑑みて、専任教職員を原則増員しない。（但し、社会 1、養護 1、数学 1、英語ネイティブ 1、については、未補充状態が継続中。英語 1・国語 1 は再雇用で補充中。）また、英語のネイティブ教員 1 名については、今後のグローバル・英語教育推進のために必要となるため、ふさわしい人材があった場合は、専任採用をしたい。（現在は臨採）

2017年度事業報告(中高)

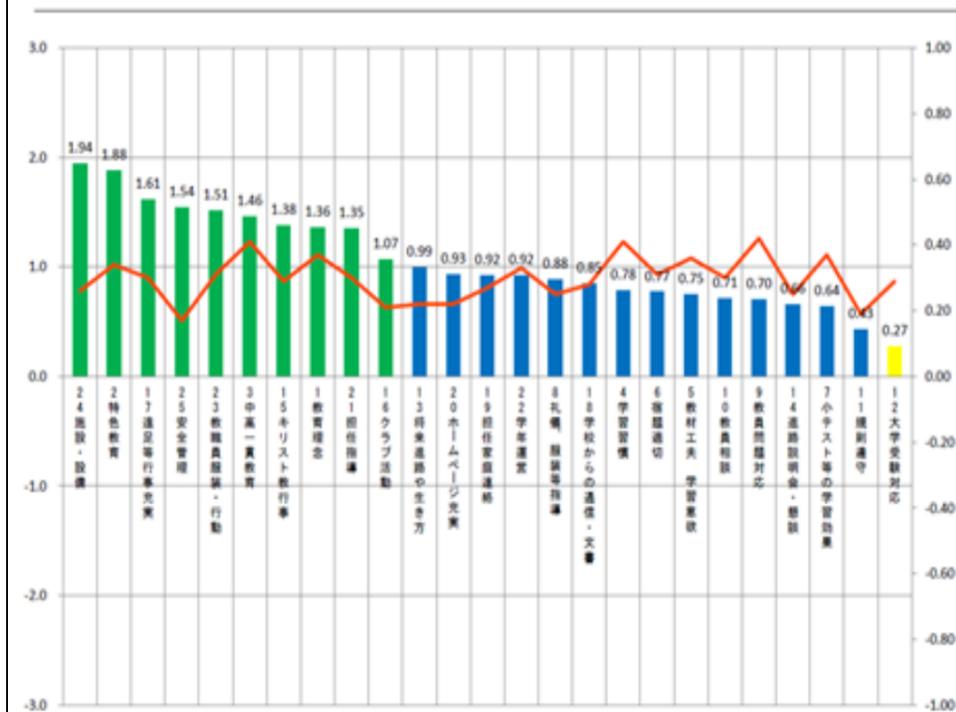
- ・中学校舎外壁、汚れの除去 ゲーンホール天井耐震点検
- ・中学校舎 3F 廊下床、補修
- ・高校校舎床、メンテナンス？（8年目）
- ・天井・屋上防水対策等

○生徒アンケート・保護者アンケート結果に基づく改善

・2016年度保護者アンケート（全25項目）を実施した結果、全項目ともプラスであった。10項目が評価の高い（2/3以上が肯定的）項目であった〔生徒は20項目〕。14項目において、半数強が肯定的である満足度を示した〔生徒は5項目〕。低めの満足度を示したのは「大学受験対応」のみとなり、昨年の2項目から1項目に減り〔生徒は0項目〕、数値も僅かながら上がった。この1項目を含め全体の向上を目指す。

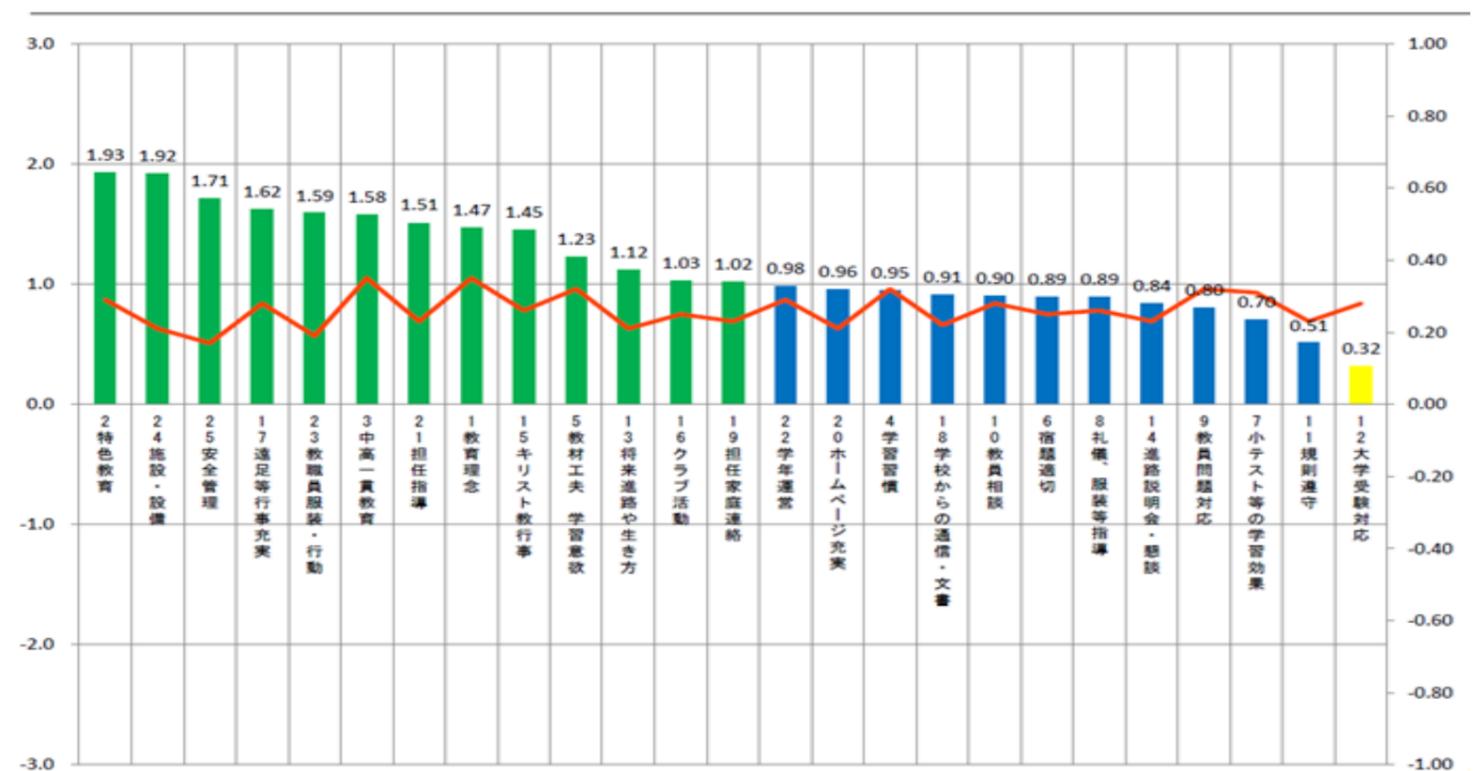
※右表の比較用資料

2016年度 保護者の満足度順位

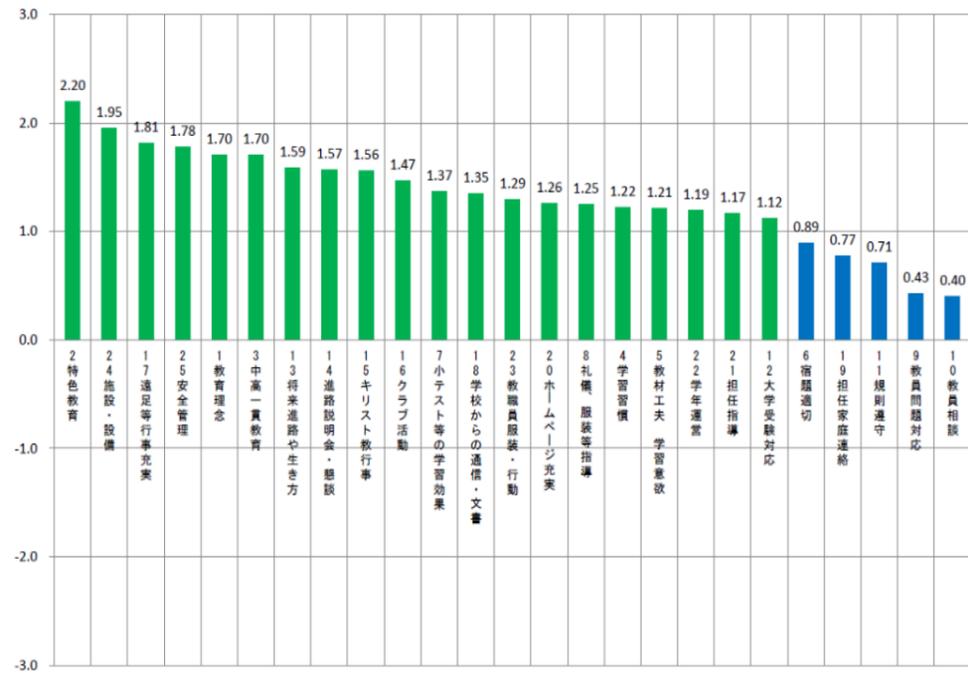


◎ 2017年度 保護者アンケート結果

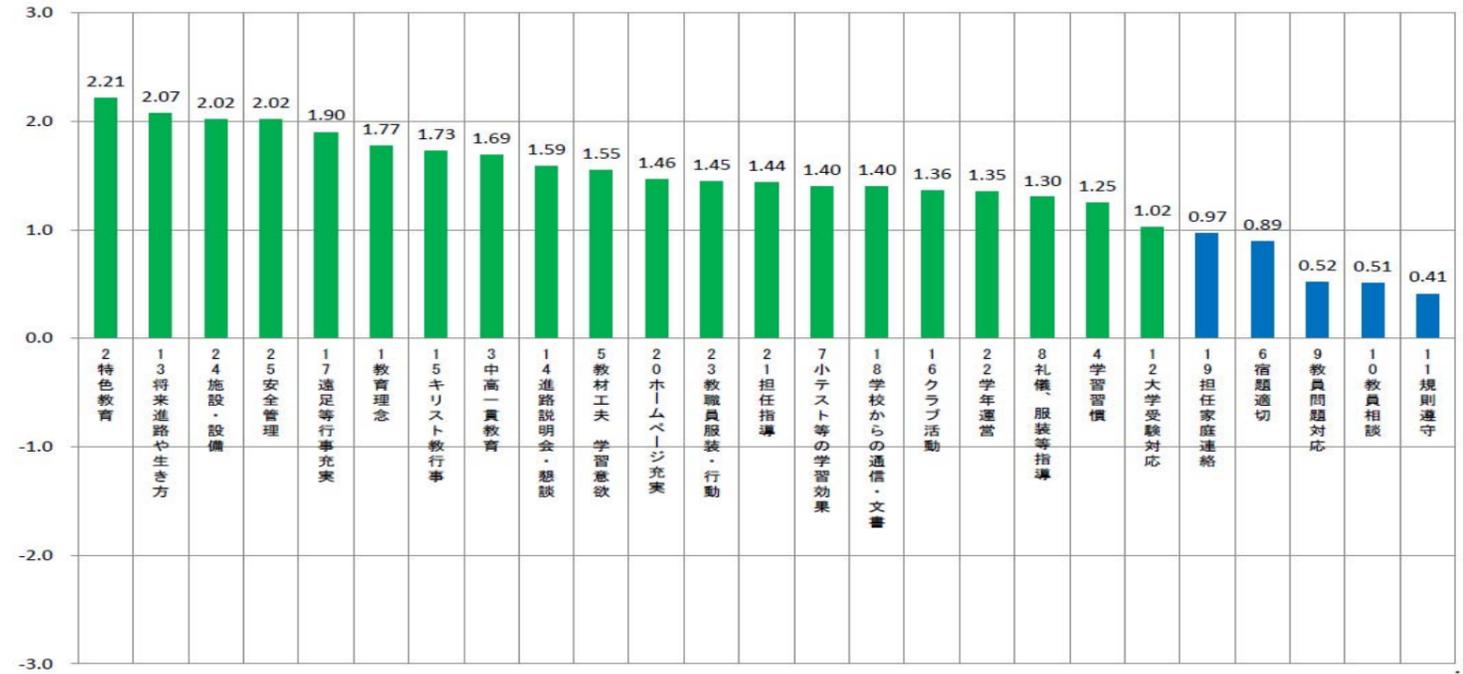
2017年度 保護者の満足度順位



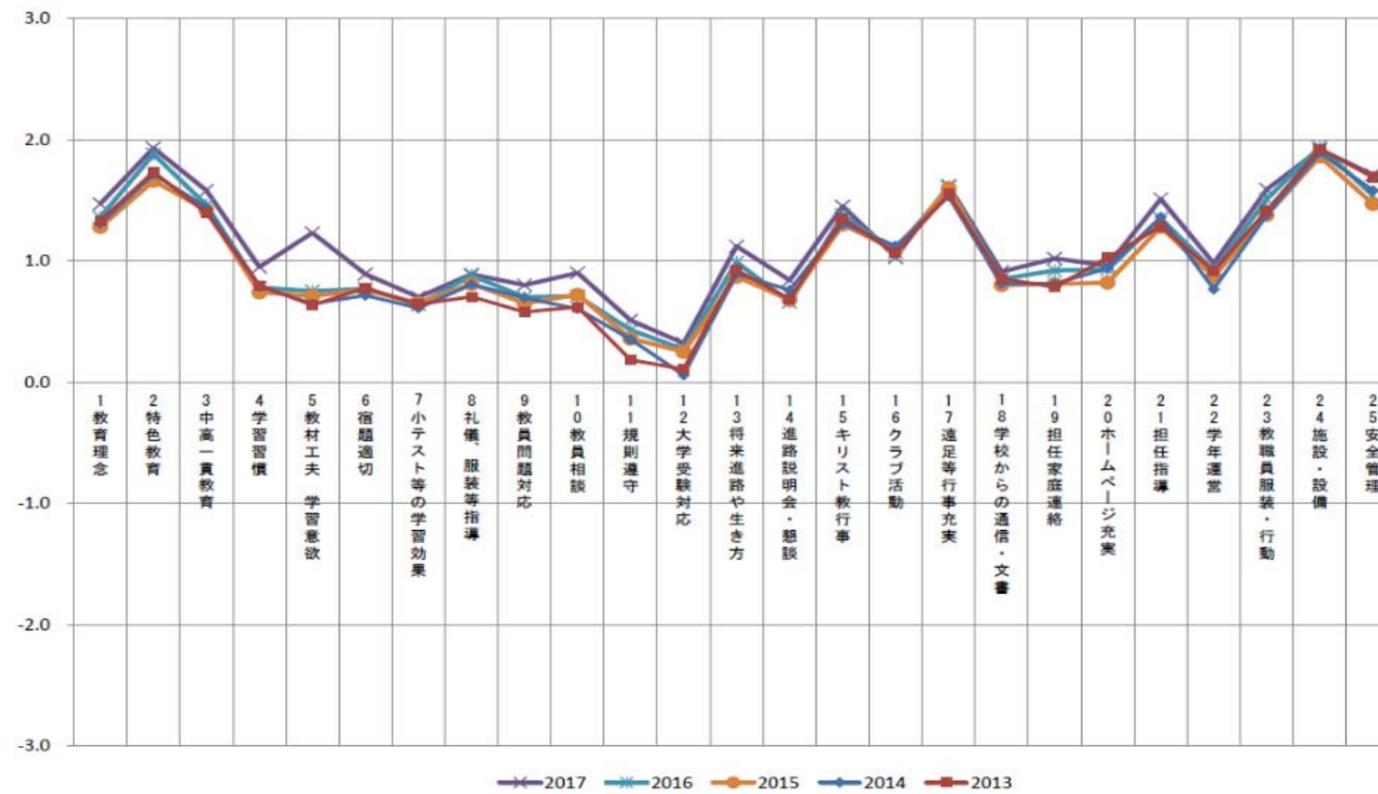
2016年度 在校生の満足度順位



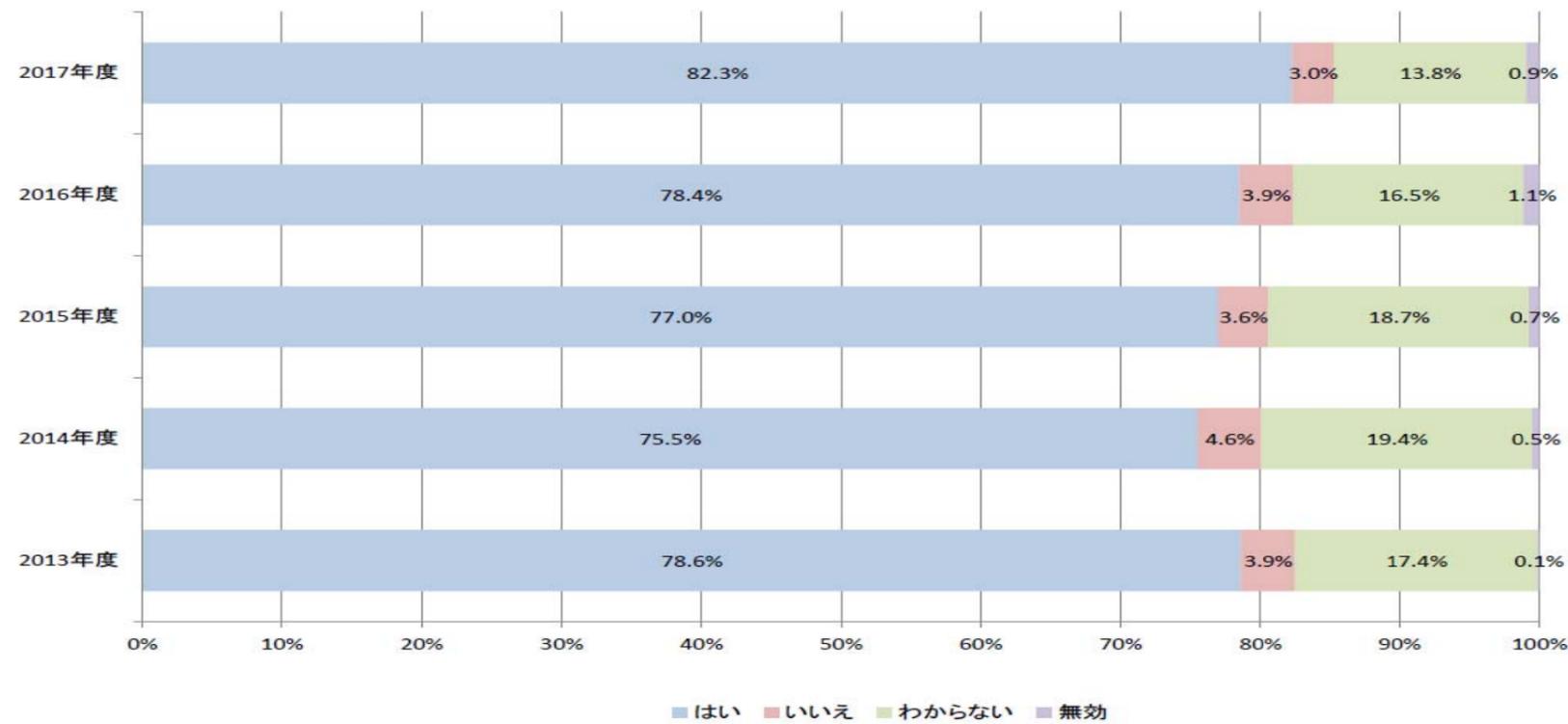
2017年度 在校生の満足度順位



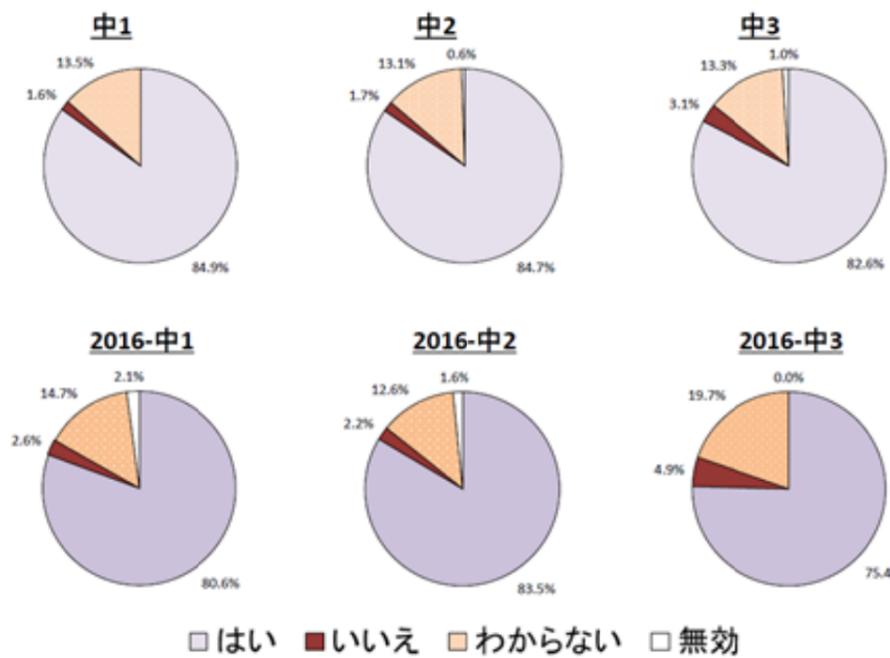
2013年度-2017年度 保護者の年度比較(質問A)



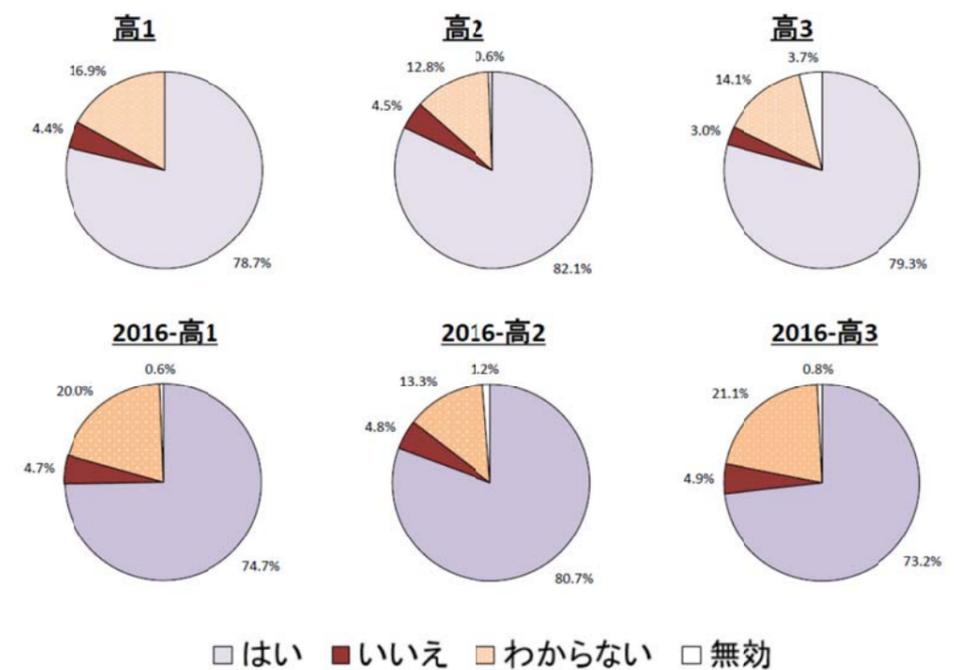
2013年度-2017年度 保護者全体(質問B:入学を親戚、友人・知人に勧めますか?)



2016年度・2017年度 保護者学年比較(質問B:入学を親戚、友人・知人に勧めますか?)



2016年度・2017年度 保護者学年比較(質問B:入学を親戚、友人・知人に勧めますか?)



(中高 SGH 関係 事業報告書資料)

2017 年度スーパーグローバルハイスクール報告書

SGH(2014～2018)第 4 年次、研究開発完了報告書

(別紙様式3)

平成30年3月30日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 広島市中区上幟町11-32
管理機関名 学校法人 広島女学院
代表者名 理事長 中川 日出男 ㊞

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成29年4月1日～平成30年3月30日

2 指定校名

学校名 広島女学院中学高等学校
学校長名 星野 晴夫

3 研究開発名

「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」

4 研究開発概要

研究開発の目的は、本校がめざすグローバルリーダー、「核の惨禍のない世界を創り出す、しなやかな女性」を育成することである。そのためには、中高の教員集団、生徒、連携先の大学がこの目標を共有することを通じて、価値観の違う他者と出会い、確かな「平和観」「対話力」「リーダーシップ」を培うことが重要である。

教員組織として、従来の部署を統合した「グローバル教育推進部」を立ち上げ、同部を中心に**課題研究の具体案**を作成し、教育の方法を**学校全体で共有**しながら、**成果を定期的に報告**し、課題を随時検討していく。

ヒロシマの理解と発信を基盤におきつつも、**グローバル規模での社会課題を探求し、当事者と対話を通じて平和を共創していく課題研究**は、先にあげた「平和観」「対話力」「リーダーシップ」の養成を意識したプログラムとなっている。

昨年度に続いて本年度も、新たな海外・校内の研修プログラムを立ち上げるとともに、高1、高2の2学年で“Global Issues I・II”(GI)に加え、今年度から“Global Issues III”を高3生向けに開講し、**より高い意識をもったグローバルリーダーの育成**を目指している。海外の中高生を本校に招き、平和構築に向けて討議する“Peace Forum”を実施し、そこでの学びを具体的な実践につなげることができるよう、工夫を凝らしている。

実施にあたっては、広島市立大学・平和研究所，首都大学東京，広島女学院大学といった高等教育機関や学生などと密接に連携すると共に，新たな連携先を開拓し，さらなる生徒の成長を促す。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(a) 経理事務の管理	—											→
(a) 事務職員の雇用	—											→
(b) 運営指導会議			→			→			→	→	→	
(b) グローバル教育アドバイザーの雇用	—											→
(c) 成果普及			→	→		→		→	→	→	→	
(d) 英語外国人講師の雇用	—											→
(d) TOEFL 講座講師の雇用	—											→
(e) 広島女学院大学との連携				→		→			→	→	→	

(2) 実績の説明

(a) 経理事務の管理・事務職員の増員・グローバル教育アドバイザーの雇用

引き続き SGH 事務業務を担当する事務職員とグローバル教育アドバイザーの雇用に加え，外国人講師や TOEFL iBT 対策講座の講師を招聘し，学校体制を整備してきた。

(b) 運営指導会議

本年度は，年 2 回実施した研究発表会（6/17・2/23）に加え，9 月 21 日，12 月 15 日，2 月 3 日，2 月 9 日に，運営指導会議を行った。

(c) 成果普及

【第 1 回 SGH 研究発表会】

開催日時：2017 年 6 月 17 日（土）11：00～16：00

【第 2 回 SGH 研究発表会】

開催日時：2018 年 2 月 23 日（木）11：00～16：30

【SGH 全国フォーラム 主催：文部科学省 筑波大学】

開催日時：2017 年 11 月 25 日（土）

【広島県高等学校教育研究・実践合同発表会】

開催日時：2018 年 1 月 24 日（水）

【SGH 等 8 校合同 カンボジア研修成果発表会 主催：岡山学芸館高校・広島女学院高校】

開催日時：2018 年 1 月 6 日（土）～7 日（日）

※その他，SGH 校である岡山学芸館高校の SGH 成果報告会や本校の文化祭，オープンスクール等にて，計 12 回成果発表を行った。

(d) 英語教育の刷新

- 英語検定準 2 級以上の取得者に対して入学試験において優遇措置をとり，中学校 1～3 年生に英語特別クラスを設置。

- グローバルリーダー育成プログラムと同時並行で TOEFLiBT・英検対策講座(2017年度は中学生 16 名, 高校生 47 名が受講) を開設。

(e) 広島女学院大学との連携

広島女学院大学と連携し, 高大連携事業の推進に努めている。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 (平成 29 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 3 月 31 日)											
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
グローバル規模で成果を挙げた生徒	→	→										
グローバルリーダー育成プログラムの強化												→
中 1 課題研究				→	→	→	→	→	→	→	→	→
中 2 課題研究				→	→	→	→	→	→	→	→	→
中 3 課題研究				→	→	→	→	→	→	→	→	→
高 1 課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高 2 課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
高 3 課題研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
大学との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
他校との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(2) 実績の説明

本校の SGH 事業は前項対象に実施: 対象人数は高校生 633 名 (中学生 656 名)
課題研究は, “Peace Studies”として 6 カ年の総合的な学習の時間 (1 単位) で実施。

(a) グローバル規模で成果を挙げた生徒

実施月	研修内容	対象学年	人数
5 月	NPT 再検討会議 (外務省委嘱ユース非核特使・ウィーン)	高 3	2
4 月	Critical Issues Forum	高 1-2	5

(b) グローバルリーダー育成プログラム

実施月	研修内容	対象学年	人数
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業/米国人大学教授による講義	高 1	19
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業/米国人大学教授による講義	高 2	24
通年	Global Issues 選抜生徒対象授業	高 3	17
通年	ディベートフォーラム GROW	Global Issues 受講の高 1	19
3 月	山梨学院大学 iCLA リベラルアーツキャンプ	Global Issues 受講の高 1	19
3 月	Global Leadership Program in Hawaii	Global Issues 受講の高 2	23

(c) 各学年の総合的な学習の時間

実施月	研修内容	対象学年	人数
通年	広島と広島女学院の被爆の実相を学ぶ	中 1	205
通年	世界の多様な原爆観について学ぶ	中 2	204
通年	長崎の被爆の実相, 核兵器廃絶の是非について学ぶ	中 3	247

通年	カンボジア学習, 平和共創プロジェクト	高 1	192
通年	沖縄について学ぶ	高 2	219
通年	模擬国連形式交渉ゲームを通して核兵器の是非について考える	高 3	222

(d) 生徒の海外研修

実施月	研修内容 ()内は研究テーマ	対象学年	人数
7月～8月	オーストラリア研修 (異文化理解)	中 3	18
7月～8月	トビタテ留学 JAPAN	高 1	2
1月	ミャンマー研修 (地方の学校訪問, 国際協力のありかた)	中 3, 高 1	11
3月	韓国研修 (平和構築のありかた)	中 2, 高 1	13
3月	カンボジア研修 (戦争の継承, 日本の支援等)	高 1	15
3月	アメリカ研修 (大学の授業参加, ボランティア活動等)	中 3, 高 1	10
3月	アメリカ研修 (現地高校の授業参加, ボランティア活動等)	高 2	23

(e) 海外からの受け入れ

実施月	研修内容 ()内は来校者の人数	対象学年	人数
4月	キルビントングラマースクール (生徒 11 人)	高校生	12
8月	Peace Forum (平和活動, NPTについて)	高校生	46 (他校 74 海外 2)
8月	中東の教員との交流会 (碑めぐり案内, ディスカッション)	高校生	14
12月	キルビントングラマースクール (生徒 2 人)	高校生	75
1月	上智大学留学生 (学生 4 人)	高校生	19
2月	ミャンマーインターナショナルスクール (生徒 18 人)	高校生	12
2月	名古屋大学留学生 (学生 40 人)	高校生	43
2月	早稲田大学留学生 (学生 8 人)	高校生	18
3月	国連インターナショナルスクール (生徒 15 人)	高校生	13

(f) 生徒の国内研修

実施月	研修内容	対象学年	人数
8月	沖縄リーダー研修	高 2	8
11月	首都大学東京 アーカイブ研修	高 1, 高 2	10
11月	関東リーダー研修	中 3, 高 1	6
12月	第 3 回 SGH 等 8 校合同 カンボジア研修研究会, 成果発表会	高 1～高 2	7

(g) 生徒による主体的な活動

実施月	研修内容	対象学年	人数
通年	核廃絶署名活動, 出張プレゼンなど関連する活動	全学年	-
通年	ヒロシマ・アーカイブ証言収録 (計 14 名の証言を収録)	全学年	-
通年	平和公園 原爆慰霊碑等案内 (通算 12 回, 合計 505 人対象)	高校生	-
4月	広島通りズム (広島の留学生に広島と呉を英語で案内)	高 3	18
ほぼ通年	全日本高校模擬国連大会	高 1, 高 2	2

(h) 大学・他校との連携

SGH 指定を受けて以来, 順調に推移している。昨年度は「日米高校生平和会議」の関係もあり海外の連携校が目標値の 30 校を超えたが, 今年度は 26 校と減少した。

指標 (アウトプット)	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度目標
c. 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	4 校	9 校	23 校	30 校	26 校	30 校

7 目標の進捗状況, 成果, 評価

この SGH 構想において, 「核の惨禍のない世界を創り出す, しなやかな女性」という目標の下, 生徒と教員が共同でグローバル人材を育成していくことを目指し, “Peace Studies”の開発や国内外の研修, 教科教育との連携に努めてきた。

以下、その成果について、本校が構想調書の中で設定した3つの力（①平和観 ②対話力 ③リーダーシップ）がどの程度身についてきたかを以下に示す。

● 生徒の変容 — グローバルリーダーとしての力がどれくらい身についたのか

① 平和観の成長

指標（アウトカム）	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度目標
自主的に留学または海外研修に行く生徒数	30名	71名	99名	135名	123名	90名
将来留学したり国際的に活躍したりしたいと思う生徒の割合	30.0%	55.5%	61.1%	64.6%	65.8%	80%

「自主的に留学または海外研修に行く生徒数」は、昨年度よりは減少したものの今年度も**平成30年度の目標値を上回る103名**という結果であった。また、校内アンケート問4の項目についても年度を追うごとに肯定的（回答番号1・2）に答えた生徒の割合が増加している。特にSGH指定以降、高校生活を送ってきた現高3生の5割以上、学校全体の6割近くが「グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたい」と回答している。SGH事業を通じて海外や国際問題への関心が高まってきた成果だと考えている。

問4：将来何らかのかたちで、グローバル社会で平和に貢献するリーダーになりたいと思うようになった。

アンケート回答項目：（1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない）〈経年比較〉%

学年	現高1				現高2				現高3			
	H26	H27	H28	H29	H26	H27	H28	H29	H26	H27	H28	H29
1	13.6	17.3	16.2	23.5	13.3	15.7	20.1	20.0	18.5	20.3	20.9	22.2
2	38.2	36.1	35.1	33.9	32.1	25.0	33.0	38.1	29.1	35.0	32.3	32.0
3	34.6	39.3	38.4	31.1	42.2	43.5	33.0	29.5	41.0	32.7	35.0	37.4
4	14.1	6.8	10.3	11.5	12.4	15.3	13.9	12.4	11.5	12.0	11.8	8.4

学年	全体			
	H26	H27	H28	H29
1	14.4	17.4	17.3	19.9
2	31.6	34.7	36.8	37.5
3	39.3	36.3	34.8	32.7
4	14.9	11.7	11.1	10.0

② 対話力の育成

「価値観の異なる他者とのコミュニケーション力」の指標として英語力の成長は以下の表のとおりである。卒業時にCEFR B1～B2レベルの資格を獲得した生徒の割合は、**全体の59.2%**であり、SGH指定前より大幅な増加がみられる。TOEFLの結果判明分も、昨年より12点向上している。

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度目標
卒業時CEFR B1～B2レベルの生徒の割合	32%	54.3%	60.0%	58.0%	59.2%	85.0%
TOEFL iBT 継続受講者の平均点推移	42点 11名対象	62.5点 11名対象	70.5点 11名対象	55.0点 9名対象	67点 11名対象	85点
TOEFL iBTの対策授業受講者の平均点	—	—	49.7点 33人	51.8点 26人	67点 11名	—

最終目標値 TOEFLiBT 85点以上の生徒数	0人	1人	3人	1人	2人	—
-----------------------------	----	----	----	----	----	---

③ リーダーシップの育成

以下の指標の数が年度を重ねるごとに増加しているのは、SGH 事業を通じてリーダーシップが育成されてきたことを示している。

指標（アウトカム）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度目標
a. 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数	70名 (延べ400名)	440名 (延べ1716名)	525名 (延べ2664名)	606名 (延べ3124名)	501名 (延べ3799名)	400名
d. 公的機関から表彰、公益性の高い国内外の大会の入賞者数	5名	10名	11名	13名	19名	20名

指標（アウトプット）	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度目標
f. グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	5名	482名	703名	712名	728名	500名

6. 研究開発の実績 に挙げた具体的プログラムに関して、上記の3つの力（①平和観 ②対話力 ③リーダーシップ）がどの程度身についたかについては、実施報告書を参照のこと。

● 学校の変化

（a） 指導体制と教員の変容

SGH 事業を推し進めるため、「グローバル教育推進部」を立ち上げ、内部の組織変革を目指してきた。また、「グローバル教育推進部」の部内に、①推進係 ②Peace Studies 係（平和構築領域・多文化共生領域）などの係を設け、より円滑に業務が遂行するよう、教員間の連携を深めていった。その成果もあり、現在は、学校全体で組織的に SGH 事業に取り組むことができている。SGH 指定を受けて、教職員の意識がどのように変化したかを図るため、独自のアンケートを実施した。その結果は以下の通りである。

今年度の SGH 諸活動（Peace Studies・国内外研修・課外活動・グローバルリーダー育成クラス（GI）など全てを含む）に関して、どのように思っていますか。

アンケート回答項目：（1.強く思う 2.そう思う 3.あまり思わない 4.全く思わない）（%）

番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	29.8	31.9	29.8	31.9	17.0	29.8	21.3	23.4	25.5	19.1
2	68.1	63.8	61.7	55.3	76.6	55.3	70.2	61.7	59.6	59.6
3	2.1	2.1	4.3	8.5	6.4	8.5	6.4	10.6	8.5	14.9
4	0.0	2.1	2.1	4.3	0.0	4.3	0.0	2.1	0.0	2.1

〈参考資料〉昨年度の教員アンケート結果

番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	51.3	48.6	31.6	41.0	30.8	21.1	42.1	40.5	27.0	19.4
2	46.2	48.6	65.8	48.7	59.0	52.6	50.0	51.4	62.2	52.8
3	2.6	2.7	2.6	7.7	10.3	10.5	7.9	8.1	10.8	25.0
4	0.0	0.0	0.0	2.6	0.0	15.8	0.0	0.0	0.0	2.8

〈参考資料〉一昨年度の教員アンケート結果

番号	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
1	35.6	44.4	20.0	37.8	8.9	26.7	31.1	28.9	15.6	15.6
2	60.0	51.1	66.7	44.4	48.9	37.8	55.6	60.0	48.9	33.3
3	4.4	0.0	6.7	17.8	40.0	17.8	11.1	8.9	31.1	44.4
4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	15.6	0.0	0.0	0.0	4.4

質問項目の内容

- Q1 今年度の SGH 諸活動に関して賛成できる。
- Q2 昨年度と比べて、今年度の SGH 諸活動の内容は充実している。
- Q3 昨年度と比べて、今年度の SGH 諸活動の進め方はスムーズであった。
- Q4 今年度の SGH 諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導方法、内容に何らかの影響を与えた。
- Q5 今年度の SGH 諸活動の計画立案や運営に関して、教員間での連携や協力関係が築かれていた。
- Q6 今年度の SGH 諸活動を通じて、大学等との人的ネットワークが広がった。
- Q7 今年度の SGH 諸活動を通じて、生徒の様子に変化が見られた。
- Q8 今年度、生徒のグローバルな課題に対する興味関心に変化が見られた。
- Q9 今年度、生徒の英語への学習意欲に変化が見られた
- Q10 今年度、生徒の進路選択に変化が見られた

アンケートの結果は、SGH 構想の実現に向け、本校教職員が一丸となって取り組む組織になっていることを示している。①全体については、一昨年度課題であった Q5「今年度の SGH 諸活動の計画立案や運営に関して、教員間での連携や協力関係が築かれていた」に 1 そう思う.2 ややそう思うと回答した教員の割合は、今年度さらに上昇し 93.6%という高水準になった。今年度劇的に増加したのは、Q6「今年度の SGH 諸活動を通じて、大学等との人的ネットワークが広がった。」である。1.2 の合計が 85.1%となり、前年度より 11.4%改善した。SGH 指定 4 年間を通じて高大連携・接続が年々改善され、大学生・大学教員と共同で取り組む活動が劇的に増加した。その結果、教員の大学とのネットワークを拡大し、指導内容・指導方法が変化している。もうひとつは、Q10「今年度、生徒の進路選択に変化が見られた」であり、6.5%上昇し 78.7%となっている。②の指定 4 年間の変化についても同じ項目が上昇している。

● 平成 26 年度 SGH 指定校 中間評価を受けて

昨年度の中間評価において、本校は 6 段階評価の最高評価の 4 校に選出された。その評価は、「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」であり、具体的な評価点は、以下の 3 点であった。

- ① 事業の取組に沿った生徒の育成、教員組織の構成は特筆すべきものがある。その一つの要因として、アクティブ・ラーニングへの指導法への転換がこの事業の効果を高め、着実に成果が上がっており、更なる発展が期待される。
- ② テーマに沿ってよく練られた指導内容であり、生徒の成果物のレベルも大変高い。特に、平和、核、途上国開発など、難しいテーマを多様なアプローチで、重層的に考えさせ体験させる教育方法については、高く評価できる。
- ③ 全教員が一丸となって研究開発に邁進し、アウトカム、アウトプットにおいて優れた数値が得られており、高く評価できる。

上記各項目に関する今年度の取り組みについては以下の通りである。

- ①事業の取組に沿った生徒の育成、教員組織の構成について

前項の「●学校の変化 (a) 指導体制と教員の変容」を参照のこと。

- ②教育テーマと方法について

在籍生徒全員が取り組む SGH プログラムの研究課題については、学年の状況に応じてマイナーチェンジを行いながらよりよい教材開発に努めている。来年度は SGH 事業の完成年度として、再度、教材の練り直しを行う予定である。

- ③アウトプット、アウトカムの数値について

前項の「●生徒の変容 ③リーダーシップの育成」にも示した通り、アウトプット・アウトカムともに高い数値が出ており、完成年度の目標値を達成している項目

もある。（その他のデータについては、平成 29 年度「目標設定シート」（報告書末に添付）に掲載。）来年度は全項目で目標値クリアを目指した取り組みを実施していく予定である。特に、英語力については、中高一貫校の強みを活かした教育プログラムの強化が必要である。

8 次年度以降の課題及び改善点

(1) 指定明けのカリキュラム開発

昨年度実施された中間評価後も、本校ではグローバル教育推進部が中心となって課題を詳細に分析し、その克服に向けた取り組みを教職員一丸となって実施してきた。その結果、今年度もアウトプット・アウトカムの数値については順調に推移している。事業完成年度にあたる次年度は、全ての項目で最終目標値が達成できるように、英語力の向上に重点を置きつつ取り組んでいきたい。

なお本校では、今年度から教育構想検討委員会が発足し、指定後の教育ビジョンを策定している。これまでの SGH で培われた新しい教育のノウハウを生かしつつ、更なる生徒の成長を期すために議論を進めている。この委員会が中核となり、来年度は課題研究検討委員会を立ち上げる。新学習指導要領が求めている探求的な学習のあり方を検討し、先行実施する計画である。

本校の課題および改善点としては、指定 4 年目以降に検証する成果目標について、卒業生の追跡調査の方法が挙げられる。他の SGH 校の取り組みなどを参考にして、正確に実態を把握できるようなシステムの構築に取り組んでいきたい。

(2) 指定最終年度にあたっての成果普及活動

平成 30 年度は、本校にとって SGH 指定最終年度にあたる。この SGH 事業の目的は、グローバル人材を育成するカリキュラムを開発し、その成果を国・地域社会に還元することにある。本校は、これまでの実践の成果を広島の地に普及するため、次年度成果普及活動の拡張を図り、近隣の学校や平和構築を課題研究としている他の SGH 校などと連携する。年度末には 5 年間の総括を発表する予定である。

補足：昨年度、（別紙様式 3）の指定枚数が 8 頁であるため、分析の詳細は、すべて実施報告書に記載している。その点をご了解いただけると幸いです。

【担当者】

担当課	グローバル教育推進部	T E L	082-228-4131
氏 名	高見知伸	F A X	082-227-5376
職 名	教諭	e-mail	takami@hjs.ed.jp